

ゲツセマネの祈り

(マタイ 26・36～43)

一、主イエスの祈り

キリストが十字架にかかられる前の晩のことです。主イエスは、弟子たちと共に一日早い過越の食事をすませ、弟子たちと共にゲツセマネという場所に來ました。〈マタイ 26・36〉さらに、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、園の奥に入って行かれました。37節です。そして、ペテロとゼベダイの子二人と一緒に連れて行かれたが、とあります。すると、主イエスは悲しみもだえ始められました。そして、おっしやいしました。37節、38節です。主イエスは悲しみもだえ始められました。そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。とあります。なぜ、悲しみもだえ始められたのでしょうか。理解するのが難しい箇所です。次のように受け止めたら、おそらく大きくまちがっていることはないと思います。それは、主イエスの死は義人としての死ではなく、英雄としての死でもなく、罪人の死であったことです。すなわち、榮譽ある死ではなく、罪人としての聖なる神からさばかれた死でした。では、キリストが背負われた罪は、だれの罪だったのでしょうか。

私共の罪です。私共の罪を、罪のないキリストが背負われ、私共が受けなければならぬ聖なる神からの罰を、キリストが受けてくださいました。ゆえに、キリストを待ち受けていた死は、出口のない深い穴に落とされるようなものでした。そのことのゆえに、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。」と語られたのではないのでしょうか。

イエス・キリストは、父の御許から遣わされた意味を祈り求めて歩んでまいりました。そして、最終的な確認が、ゲツセマネの祈りにおいてなされました。主イエスは、弟子の中でも最も信頼するペテロとヤコブとヨハネに言われました。〈ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。〉と。それほどに三人を信頼しておられたのであります。三人は主イエスがもたえ苦しむ姿を目の当たりにし、主イエスが祈られたことばを耳で聞きました。だからこそ、39節があるわけです。〈マタイ 26・39〉と、ところが弟子たちは眠ってしまいました。〈マタイ 26・40〉と書かれています。弟子たちの眠りとは何だったのでしょうか。前後関係から見ますに、単なる疲れではなかったようです。

二、靈は燃えても肉は弱い

41節を見てまいります。〈誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていないように、目を覚まして祈っていないように、目を覚まして祈っていないように〉

さい。靈は燃えていても肉は弱いのです。とあります。〈靈は燃えていても肉は弱いのです〉とはどのような意味なのでしょう。か。「靈」は、神の御霊であり、御霊に属することであり、キリストによって新しくされた人です。ヨハネの福音書で、主イエスは語っておられます。〈ヨハネ 3・6肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は靈です。〉と。ですが、「靈」を弱めてしまうものがあります。それは「肉」(サルクス)です。「サルクス」には「肉」の意味もありますが、「生まれながらの人」「自らを誇ろうとする人」の意味もあります。私たちの生まれながらの性質が頭をもたげてまいりますと、キリストによって新しく生まれた人が弱くなってしまう。もちろん、主イエスがゲツセマネで祈った際は、ギリシア語で祈ったわけではありませんが、近年の研究によれば、アラム語ではなく、主イエスはヘブライ語を話しておられたようです。ですが、福音書が発行されたとき、すでにパウロの手紙は出回っており、正典、すなわちキリスト教会の信仰の基準になり始めていました。ですから、今申し上げたような理解が成り立つわけです。

三、主イエスは確信を得た

42節、43節をご覧ください。〈マタイ 26・42～43〉と二度目の祈りのこと

が書かれています。その際、弟子たちは再び眠ってしまいました。靈は燃えていても、肉、すなわち生まれながらの性質に負けてしまったのです。

ところで、主イエスの一度目の祈りは「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」でしたが、二度目は「わが父よ、わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりましように」でした。ここに、御霊なる神の御助けを見る事ができます。

44節、45節をご覧ください。主イエスは、彼らを残して再び離れて行き、もう一度同じことばで三度目の祈りをされた。それから、イエスは弟子たちのもとに來て言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。見なさい。時が來ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。」とあります。

三度の祈りを通して、主イエスは父なる神のみこころを確信し、迷いがなくなられました。覚悟が決まったようにも、お見受けいたします。こうして、ユダが裏切ったことについて、神の御手の中にあつて起きているという確信を持っておられます。これこそ、罪のない人が聖靈に満たされたときの姿です。